

持続可能な処分場の適正規模について

株式会社エックス都市研究所

山口直久

持続可能な処分場の姿がかなり見えてきたが、Sustainableな処分場整備のグランドデザインを描いてゆく上で、小規模分散型の埋立地が良いのか、それとも大規模集約型の埋立地が望ましいのかが悩ましい。

廃棄物埋立地というのは、廃棄物の最終処分であるとともに土地造成行為であり、そういう意味では、ある程度は集約して大規模化する方が土地の利用用途は広がるし、経済性にも優れるだろう。しかし、どの程度の規模までなら一世代で安定化するのだろうか。一方、小規模な処分場であればリスク管理をしやすい反面、跡地の利用方法が課題になってくるだろう。

小規模分散型の埋立地と大規模集約型のそれぞれについて、埋立の持続性の定義に適合しているか見比べると、どちらもまだ課題は残されており、今後これらに取り組んでいく必要があるだろう。

埋立の持続性の定義への適合性

埋立の持続性の定義	小規模分散型の埋立地	大規模集約型の埋立地
一世代で安定化する埋立地	○ 比較的管理しやすい	一世代で安定化するか？ どのくらいの規模までなら良いか。
住民が許容する埋立地	比較的受け入れられそうだが、処分場の数だけ関係者が増える。	周辺の負担感が増える。
埋立跡地が普通の土地になる	跡地の有効利用が課題 一世代で安定化するならば、どちらもいずれは「土に戻る」だろう。だが、「普通の土地」を目指すのであれば、土地としてどのように利用できるかが課題。	○ 大規模な土地造成が可能
埋立地の役割が廃棄物処理全体で最適化されている	○	○